

梅屋の二階

美知代

ふと氣が付くと、これは又何とした事
 !此身は臥床の上に横はり、枕頭をば見
 も知らぬ男女が數多取り巻いて、其中の
 一人——長い疎髯の恐ろしい——は妾の
 顔を見入つて、

「何うじゃ、氣が付いたかの」

はてな、これは誰でせう、お醫者様か
 知らず、それにしても餘りに尊大過ぎた様
 子です、兎に角これは病氣したのに相違
 は無いが、それにしても合點の行かぬの
 は此場のしぎ、一鉢此處は何處?と覺束
 なくもしどろの記憶を辿つて見れば、初
 め麗なのが段々歴然となつて、お、それ
 !此處は鹽原の旅館、梅屋の二階。

——痴情の果と譏らばそれ、云ふに
 云はれぬ深い事情が有つて、と云つたば
 かりでは解りませぬ、雅男さんと妾
 とは、所謂筒井筒振分髪のお親しい仲、ま
 へとに嫁様ごつこに、私共は甚麼に嬉
 しい行末を語り合つたでせう、實際妾は
 雅男さんを死ぬ程思つて居りました、あ
 の人と共に生きるのではなくて、此世は
 全く無意味だと迄思つた位ですもの、戀

したの戀せぬのと、もうく其處どころ
 の騒ぎではなく、雅男さんとも『世の
 中に成効しようとするのは何の爲?みん
 な二人の戀を全くするためだよ』と、仰
 有りく致しました、それがふとした事
 から、田舎にはよくある習ひの、村と村
 との関係上親々の争ひから二人の仲は裂
 かれて、添ふに添はれぬ悲しい事になり
 ました、けれども二人の戀は村の反對、
 父母の反對とそれ位で容易に思ひ絶ゆべ
 くもありませぬ、嗚呼何として此清い、
 美しい愛情を蹂躪する事が出来ませうぞ
 とは云へ、戀の神は何處迄も二人につ
 れなく、何うがなして……と思ひ煩つて
 居ります矢先に、思ひも掛けぬ結婚問題
 は妾の身に迫つて、無分別とは知りなが
 ら、諸共に死ぬべく手に手を執つて、人
 知れず此處に來たのでして、彼の夜毒を
 仰いで悶へたのを覺へて居りますばか
 り、其後は瞭乎と致しませぬけれど——
 雅男さんは如何やら御逝去なさつた様子
 ……

さてこそ死後れ!
 と思ふと慄然として、妾は思はずも總
 身に汗しました、けれ共藥劑は雅男さん

のお手づから頂いて、而も分量に異りは
 無く、平常からお弱いとは申せ、雅男さ
 んばかりがお倒れなさつて妾が助かると
 は、其様な譯は無い筈、して見ればこれ
 は屹度妾と同じに生存て被居るに相違な
 い、では何處に?

「あの、雅男さんは?」

「雅男? つれの男か」

「はら」
 「本官が出張した時、最早既に死亡し
 て居て、早くに検死も済ましたぢや、
 して今にも親御が來られて死骸を引取
 るげな」

「エッ」とばかり、今更に、悲し、口惜
 し、耻かしの思は潮の如く胸一杯にみな
 ぎり渡つて、妾は又もや生體を失ひまし
 た
 (つづく)

